

ビワ生育情報

千葉県
令和元年7月号

最近1年間の気象及びビワの生育状況

平成30年7月から令和元年6月までの月別の気象は表1に示した。この1年間の平均気温は16.3℃で平年より0.7℃高かった。降水量は年合計が1,893mmで、平年の93%、前年の85%であった。日照時間は年合計が2,111時間で、平年の109%、前年の99%であった。

時期別の気象とビワの生育状況を振り返ると、平成30年の梅雨明けは6月29日頃で平年より23日早く、7月から8月上旬にかけて高温乾燥条件が続き、8月第4半旬に低温があった影響により、花房の発現は平年よりも早く、花房の着生率は平年より多かった。関東に接近した台風は1回あり、潮風害による樹勢の低下がみられた。冬の間の気温は高く、開花の進みは早かった。幼果が寒害を受ける最低気温-3.0℃以下の日はなく、寒害はほぼ見られなかった。開花は早かったものの4月の気温は平年より低く5月は平年よりも高く推移した結果、果実の生育は平年より早く進み、収穫期は平年より早かった。

表1 平成30年7月～令和元年6月の気象（暖地園芸研究所）

年	月	気温(℃)			降水量(mm)			日照時間(hr)		
		本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
H30	7	26.5	24.4	25.6	155	194	39	256	169	250
	8	26.8	26.0	25.6	25	144	140	255	217	156
	9	22.7	22.7	22.5	416	251	282	115	145	134
	10	18.9	17.9	17.7	123	250	525	151	137	99
	11	14.0	13.2	13.6	162	148	289	135	145	156
	12	9.3	8.6	7.7	120	85	42	121	165	191
H31	1	6.6	6.0	5.8	24	90	111	206	170	193
	2	7.8	6.3	6.0	89	97	21	102	152	161
	3	10.7	9.2	11.8	112	186	204	180	157	200
	4	13.1	13.9	16.2	214	174	69	199	172	205
R1	5	18.5	17.8	18.7	158	174	229	235	177	203
	6	20.9	20.7	21.4	299	244	282	157	133	174
平均/計		16.3	15.6	16.1	1,893	2,037	2,233	2,111	1,939	2,122

平年：昭和56年～平成22年の平均

本年度産果実の特徴

1. 収穫期

収穫期は表2に示した。暖地園芸研究所における収穫始期、盛期及び終期はそれぞれ、「楠」が5月21日、5月27日、5月31日、「大房」が5月30日、6月3日、6月7日、「田中」が6月3日、6月10日、6月14日であった。収穫盛期は3品種共に平年より4～7日早く、前年より0～5日遅かった。

表2 収穫期（暖地園芸研究所）

品 種	収穫始期(月. 日)			収穫盛期(月. 日)			収穫終期(月. 日)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
楠	5.21	5.29	5.21	5.27	6.3	5.27	5.31	6.7	5.30
大房	5.30	6.3	5.29	6.3	6.7	5.31	6.7	6.11	6.5
田中	6.3	6.11	6.3	6.10	6.15	6.5	6.14	6.19	6.8

平年：昭和63年～平成29年の平均

2. 果実の大きさ及び収穫量

収穫果実の大きさと品質は表3に示した。果重は「楠」が50g、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ85g、75gであった。「楠」は平年より6%下回り、「大房」は平年より6%上回り、「田中」は平年より1%上回った。

横径は「楠」が4.4cm、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ5.4cm、5.0cmであり、3品種共にほぼ平年並みであった。縦径は「楠」が4.9cm、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ5.6cm、5.5cmであり、3品種共にほぼ平年並みであった。

果形指数は「楠」が0.91、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ0.96、0.90であった。平年に比べて3品種共に縦長の果形であった。

本年の着花房率は高く、寒害を被った幼果はほぼなかったため、最終的な着果量は3品種共に平年より多かった。また、果樹カメムシ類の被害は少なく、主力品種「大房」は大玉傾向であったため、産地全体の収量は平年より多かった。

3. 糖度及び酸度

糖度は「楠」が12.9、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ11.2、11.4で、3品種共に平年より高かった。

酸度は「楠」が0.13、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ0.21、0.25で、「大房」は平年より高く、「楠」及び「田中」は平年より低かった。

4. 食味

果肉硬度は「楠」が0.48、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ0.56、0.53で、「楠」及び「田中」は平年より軟らかく、「大房」は平年並みであった。

糖酸比は「楠」が100、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ55、51で、「楠」及び「田中」は平年より甘味を感じやすく、「大房」は平年より酸味を感じやすかった。

5. 病害虫及び生理障害の発生

本年は、収穫期までの果樹カメムシ類の飛来数は少なく、産地における被害も少なかった。クワゴマダラヒトリの食害は平年並みであった。病害では、がんしゅ病の発生がややみられた。生理障害では、5月から収穫期直前まで日差しが強く、高温の影響で「大房」を中心に日焼け及び紫斑症の発生が見られた。

表3 果実の大きさ及び品質

品種	調査地	果重(g)		横径(cm)		縦径(cm)		果形指数		糖度(Brix)		酸度(g)		硬度(kg)		糖酸比	
		本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年
楠	暖地園研	50	53	4.4	4.5	4.9	4.8	0.91	0.95	12.9	12.3	0.13	0.15	0.48	0.52	100	82
	青木	76	79	5.2	5.3	5.2	5.4	1.00	0.98	11.6	10.6	0.17	0.15	0.55	0.56	66	71
	大房南無谷	89	78	5.4	5.2	5.7	5.4	0.95	0.97	10.7	10.6	0.22	0.17	0.56	0.57	49	62
	暖地園研	89	83	5.4	5.3	5.8	5.5	0.93	0.97	11.5	11.2	0.23	0.19	0.58	0.58	49	60
	平均	85	80	5.4	5.3	5.6	5.4	0.96	0.97	11.2	10.8	0.21	0.17	0.56	0.57	55	64
大房	青木	80	73	5.1	5.0	5.5	5.4	0.93	0.93	11.1	11.2	0.27	0.28	0.53	0.55	56	40
	田中南無谷	69	72	4.7	4.9	5.4	5.5	0.87	0.90	10.7	10.4	0.26	0.31	0.53	0.56	42	33
田中	暖地園研	75	79	5.0	5.1	5.7	5.6	0.89	0.92	12.6	11.5	0.23	0.29	0.53	0.56	55	39
	平均	75	74	5.0	5.0	5.5	5.5	0.90	0.91	11.4	11.0	0.25	0.30	0.53	0.56	51	37

果形指数：横径/縦径 糖度：屈折糖度計の測定値 酸度：果汁100ml中の酸含量をリンゴ酸(g)に換算した値
 硬度：果実硬度計による測定値 糖酸比：糖度/酸度
 平均：3地区の平均、平年：平成元年～平成30年の平均(ただし硬度は平成12年～平成30年の平均)

8月～10月の作業

8月下旬から9月下旬までがせん定及び施肥の適期となる。花芽は9月中旬頃には確認できるようになり、10月に入ると発育が進み、花房の形を表し、10月上中旬には摘房・摘らいの作業が始まる。

せん定

8月下旬から9月中旬に行う。徒長枝や混んでいる枝を間引いて、樹冠内部に光が入るようにする。作業の効率化を図るため、二段盃状形の樹形を目指し、低樹高化に努める。

施肥

9月に基肥を施用して花房の伸長、充実を図る。耕土の浅い園では10a当たり成分量で窒素12kg、リン酸9kg、加里9kgを施用し、耕土の深い園ではそれぞれ11kg、9kg、7kgとやや少なめにする。

摘房・摘らい

摘房は発育不良の花房や混み合った花房を間引き、1樹の全枝の半数に花房を残す。

摘らいは花房基部から3段目までの小花梗の中から充実した2段を残して他をかき取る。花房の長さが3～5cmの時に摘らいすることで、開花期間を延長させることができ、寒害の被害を受けにくくすることができる。

なお、表の数値は、表示単位未満を四捨五入したため、合計値と内訳の計は一致しない場合がある。

【問合せ先：千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 特産果樹研究室 電話0470-22-2961】
 ※果樹の生育情報は「ちばの農林水産業」の「生育情報」でも御覧いただけます。
<http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiiku/index.html>